



女子大生お姉様の 濡れ舌個人指導

斐芝嘉和
挿絵 / ズンダレぼん

立ち読み版

KTC
KILL TIME COMMUNICATION

レッスン1	御褒美宣言	4
レッスン2	妄想と現実	26
レッスン3	ささやかな復讐	51
レッスン4	目隠しプレイ	71
レッスン5	努力の報酬	95
レッスン6	なし崩し69	133
レッスン7	お風呂場エッチ	168
レッスン8	眠れる美女	208
レッスン9	合格祝いは筆おろし	243



登場人物

Characters

倉 鞠子

(くら まりこ)

崇の幼馴染みで、二つ年上の女子大生。元IMO（国際数学オリンピック）日本代表候補で、名門工学部在籍中の才媛。グラマーな眼鏡美女で合気道の有段者でもある。受験勉強にかまけて崇に色々とちょっかいをかけてくる。

荻野 崇

(かりの たかし)

受験に失敗して、東京の鞠子の家に居候中の冴えない浪人生。女性経験なし、初心で煩惱満載の憎めない青年。

そんな少年のウブな反応を、鞠子は余裕の笑みで見下ろす。

「まあ怖い。タツくんが怖いから、オマケの御褒美もあげないことにしよう」と

「……えっ?! ちよ、ちよっと待った、待って……お待ちください、お姉様!」

立ち上がる素振りを見せた美女を慌てて引き留め、土下座しそうな勢いで必死に頭をさげる崇。ストーンと座り直した鞠子は久々に意地悪そうな笑みを深め、ドギマギしている崇の瞳を悪戯っぽく覗き込む。

「なあに? ひとりエッチの時間じゃないの、童貞くん?」

完全にナメられている。あからさまにバカにされている。

(ち、畜生……ッ! マリ姉じゃなかったら、とつくの昔に押し倒してるぞ!)

できもしないことを考え、なんとか怒りを鎮めて、崇は卑屈な表情になった。我ながら情けない、と思いつつも、

「お、オマケの御褒美って……なに?」

逸る気持ちを抑えて聞き返す。約束は七十点以上、そして鞠子は約束に厳格な女性。ほんのちよつとした間違いで目標に到達できなかったからといって、気軽にマケてくれるようなヒトではないはずなのだが――。

「ホントにもう、なにも聞いてなかったのね。七十点には届かなかったけれど、タツ

くんは三教科の問題集を毎日十ページずつ解いているじゃない。その頑張りに免じて、大マケにマケて、ちよつとしごいてあげよつかなくて思ったの」

「う……嘘ッ!!」

「嘘じゃないわよ。私だって鬼じゃないから。一生懸命頑張ってる真面目なコには、それなりの御褒美をあげちゃうわよ」

悪戯っぽい笑みをさらに深めた鞠子は、ホオズキのように赤らむ崇の顔をキラキラした瞳で見つめたまま、

「だいたい、ココをこんなに大きくしていたら、勉強どころではないでしょう?」

右手を伸ばして少年の股間に触れた。

「はうっ!!」

強すぎず弱すぎず、気を持たせるような微妙なタッチに、思わずビクツと硬直し、椅子の縁ふちを握り締める崇。

「うふふ……今日も硬いわね。いったいいつからエッチなことを考えていたの?」

ズボンの上から二度、三度、とはしたくない強張りを撫でた美女は、白い細指をしなやかに躍らせ、片手だけでベルトを緩めた。

「な、慣れてるなあ……」

「バカね、そういうときは器用だなあつて言うの。慣れてるなあ、では、まるで私が男遊びばかりしてるエッチな女のコみたいじゃない」

「……違うの？」

「ううん、正解よ。でもね、相手がタツくんだからこうして包み隠さず話しているけど、別のヒトだったら、自分がエッチだつてことは隠しておきたい。これがほかの女のコならなおさらよ。だから、あ、このコ経験豊富だなんて思つても、そう考えたことを相手に悟らせてはダメ。デリカシーがない男のコは嫌われるわよ」

受験勉強よりタメになるアドバイスを心に深く刻み込んでいる間に、器用な指先はジッパーを引き下ろしていた。ギチギチと強張つていた淫棒がトランクスを押し上げ、赤黒い背がスリットから自然に迫り出してくる。

「マリ姉つて、淫乱だったんだ……」

「なによ、文句ある？ イヤならすぐにやめるけど？」

「い、イヤじゃないです、やめないで！」

情けない声で哀願すると、「よろしい」という返事の代わりに、下着のスリットに白い細指が滑り込んできた。

「く、お……ッ！」

滾る^{たぎ}牛肉にはかなり刺戟的な、ヒンヤリとした感触。細くしなやかで、絹のように滑^{なめ}らかで——畏^{かしこ}まる淫茎に、無遠慮に絡みついてくる。

(うわ、うわ……うわああつ！ ゆ、夢じゃない……夢じゃないんだ、コレ……)

下着に引っかかっていた尖端が強引に掻き出されると、布地に擦れた亀頭にジーンと、心地よい痺れが染み着いた。

鞆子の細指に締めつけられた肉棒が、熱い血潮を溜めて不穩に軋む。

慣れ親しんだ妄想とはまったく違うが、しかしこちらのほうが断然よい。なにしろ、崇のおぞましい物体に指を絡めているのは芳しく香る憧れの女性で、しかも愉しそうに微笑んでいるし、本当に好きそうだし——きつともつとずつと、悶々とする妄想より遙かに気持ちイイことをしてくれるはず。

赤黒く怒張した醜い淫棒に、鞆子の指はあまりにも細く、しなやかだった。ペニスとのコントラストで色の白さが際立っている。透明なマニキュアを塗った形よい爪が、華奢な指先で健康的に輝いている。

こんなにも綺麗な女手が、汚いはずの肉棒に、こんなにしつかり絡みついて——その事実だけで、崇はすでに果てそうだ。眉根を寄せ、歯を喰い縛って、暴発しそうな射精欲求を一生懸命抑え込む。

「だいたい、よく考えてごらんさい。私がこういう性格だからタツくんは気持ちよくなれるんだぞ？」涙を流して感謝されるのなら分かるけど、私にエッチなことをさせておいて淫乱って蔑むんだとしたら、納得いかないなあ」

「さ、蔑むだなんて、そんな……お、俺は、ただ、なんというか……マリ姉がほかの男にもこんなことをしているだなんて、思いたくないんだ……」

「身勝手な独占欲を誇らしげに披露されても、全然嬉しくないわよ」

言葉はやや刺々しいが、声には微笑が含まれていて、ペニスに触れた細指にも非難や怒りは感じられなかった。

白く華奢な指先が、雄々しく反り返る淫棒のシルエットをツツ、ツツ、となぞる。羽根のように軽い、焦らすようなタッチ。肉茎の側面を撫で上げられると芯に熱い溶岩が沸騰し、カリ首やエラなどを掠められると強烈な快感が火花のように弾ける。

「オチンチンって、健気よねえ。ときや場所を弁えずに大きくしたらヘンタイって蔑まれるのに、肝心なときに勃たなければ役立たずって笑われて……強く在れ、という暗黙の社会的重圧がありながら、それに応えて暴力的な行為をすれば重罪。サカリのついた青少年としては、なんとも息苦しい毎日よねえ」

「ちよ、待っ……む、難しい話をされても、俺……」



茹で蛸のように顔を赤らめ、上擦った声を絞り出す崇。爆発せんばかりに怒張した男根に、触れては離れるヒンヤリとした指の感触があまりにも気持ちよくて、鞠子の話はちつとも耳に入らない。

「別に難しい話じゃないわよ。必死に我慢している男のコつて、可愛いから好き。そうそう、その顔。いまのタツくん、とつてもステキよ」

「え……え？ な、なにが……ふぁっ!？」

焦らすような接触しかしていなかった細指が、急にしっかり、淫棒に絡みついてきた。揃えて伸ばされた四本の指が、強張った裏筋を力強く支える。わずかに汗ばんだ柔らかな掌が、鋼はがねのように硬い淫棒の背に、吸いつくように密着。

自分で握るときとはまるで違う、気が遠くなるような快感だった。触れているのが憧れの——知的な美女の華奢な手指だと思つと、それだけでもう、身体ばかりか頭の芯まで蕩けてしまいそうだ——が、しかし。

「射精しちゃダメ！」

心地よい手指で少年を追い詰めながら、歳上の眼鏡美女は意地悪なことを言った。

「いい？ どんなに気持ちよくても射精してはダメよ。私、男のコがヒイヒイ言いながら悶え苦しむ姿が大好きなの。タツくんが苦しむ姿、私に見せて」

「えっ?! ちょ、待つ……ああ待つて待つて、ま、まだ、心の準備があっ!」
慌てて手を伸ばし、腰に覆い被さるような格好になった鞠子の背を押したのだが、もう遅い。

滾る淫棒をギチッと握り締めたたおやかな女手が、素早く激しく動き始める。弾けんばかりに怒張した牡肉に、凄まじい快感が次々と炸裂。

物理的な刺戟もさることながら、しつとりムッチリとした美女の放つ芳醇な存在感にも圧倒された。

仰け反って震える崇の胸元で、前のめりになった鞠子の頭がわずかに上下している。躍る黒髪が、艶々光る。

「ふあ……く、うう……ッ!」

淫棒の悦びに喘あえげば、甘酸っぱいシャンプーの香りを胸一杯に吸い込んでしまい、羞恥や理性が蕩けていく。意地悪な「姉」を押し離すつもりだった両の手は志半ばで目的を見失い、心地よさに導かれるまま知らず知らず指先に力を込めて、薄手のセーターの下にある柔らかな女体を揉み込んでしまう。

「そう、我慢よ、我慢。私はどんなことでも必死に頑張れるコが大好きなの。タックんはいいコだから、まだまだ我慢できるわよね?」

身体を捻^{ひね}って崇の顔を見上げつつ、空いているほうの手で眼鏡の蔓をツツと押し上げて、意地悪な笑みを深める鞠子。実に愉しそうだ。

「く……くそおっ！ エッチなだけでなく、マリ姉はSだったのか！」

「Sは嫌い？ やめて欲しい？」

「え？ い、いやその……というか、ち、近いよ、マリ姉っ！」

「んん？ なあに？ なにが近いの？」

「く、口……息が……な、なんでそんなに、顔……近づけてるんだよおっ！」

力の入らない手で鞠子の背を打ち、崇は苦しそうに身を振った。その間も、真っ赤に輝く亀頭が熱い微風にくすぐられている。艶めかしく微笑んだ鞠子が、その知的な美貌を、文字通り息が吹きかかるほど近くまで寄せているのだ。

「うふふ……好きなのよ、我慢汁の匂い」

「が、我慢汁って……お、俺のマリ姉は、そんなこと言うヒトじゃ……」

「あらそう？ ならば想像して。いま、私の唇は、タックんのオチンチンに触れそうになっているのよ。ほら、分かるでしょう？ こんなに近くにあるのよ」

「うわっ!! や、や……やめてえっ！」

ふわふわと吹きかけられる、湿って熱い吐息。

想像するなど言われても、たぶんモヤモヤと想い描いてしまっただろう。現実にはまだだが妄想の中ではすでに、崇の逸物いちもつは憧れの美女に。パツクリ啜え込まれていた。

亀頭に滑る柔らかな唇、そのプリプリとした弾力。

エラ縁やカリ首に貼りつく舌の、しなやかで器用な蠢うごめき具合。

感触は想像するしかないが、童貞少年には映像のないやらしさだけで十分だった。白くたおやかな鞠子の手の中で、ただでさえ硬かった淫棒がもう一段硬くなる。柔らかくてスベスベした掌の下、赤黒い淫茎が青臭い粘液を薄く滲ませ、淫らかな唇に迫られた亀頭はますます紅く、ルビーのように輝き始める。

「どう？ エッチなんか絶対にしてくれなさそうな清純なお姉様と、エッチ大好きな現実のお姉様——タツくんはどっちの私が好き？」

「げ、現実ッ！ そんなの現実に、き、決まって……あつ!? あう……くうっ！」

しつかり握って激しくしごいていた手指が、不意に解けた。

が、完全に離れたわけではない。
限界寸前の牡肉に掌の端や指の側面をさりげなく擦りつけて、ギチミチと軋んでいる男根を改めて愛おしそうに撫で回す。

「こんなことをしておいて言うのもアレなんだけれど、私、決して淫乱ではないのよ。

そりゃあこの歳ですから、男のヒトをまったく知らないってワケじゃないけれど……エッチする相手は厳選してるし、コレだって、タツくんが毎日頑張ってるからその御褒美にとって……ドキドキしながら、タツくんのために一生懸命しているのよ。こういうの、本当は全然、なにも知らないのよ」

「う、嘘だッ！」

「あら？ 信じてくれないの？ お姉さん、哀しいなあ」

むくれた亀頭の尖端にヒタッと据えられた細指が、鈴口の周囲に小さな「の」の字を書く。言葉とはうらはらに、実に手慣れた指技だ。握られしごかれたときは別の、電撃のように凄まじい快感が、尿道を逆流して滾る淫棒を駆け抜けていく。

「私がイヤな気持ちを抑え、愛するタツくんのために一生懸命こういうことをしているって思ったら、ますます昂奮するんじゃないの？」

「そ、それは……」

快感に朦朧とした頭を捻ってみたが、ペニスに躍る白指の感触が気になって気になつて、思考は少しもまとまらなかった。

硝子細工ガラスのように華奢な指先に、弾けんばかりに怒張した亀頭がキュッキュツと撫でられる。痛いほどに張り出したエラが、滑らかな爪の背に軽くしごかれる。かと思

え、^{かぎ}鉤に曲げられた細指に裏筋を引っかけられ、薄皮の下で硬く強張っている海綿体のコリコリした感触を愉しむように軽く上下に揺すられ――。

まさに弄ばれている。

眼鏡が似合う歳上の美女に、若いペニスで翻弄されている。

(ま、マリ姉が清纯かどうかなんて……ど、どうでも、いいや……)

ようやく崇は悟った。

ずっと憧れていた知的な美女がすでにたくさん男性に抱かれたあとだなどという現実、いまでもやはり認めたくないのだが、それはそれとして、いましてくれているコレは身も心もトロトロになるほど気持ちいい。

そう思えば、清纯か淫乱かなどという不^ぶ粹^{すい}なラベリングは、無意味だ。若さのせいなのか、童貞だからなのか――現にある肉体的な悦びがあまりにも鮮烈すぎて、心理的な味つけにはなんの効果もない。

「……ッくん、タックくん？　ねえ、聞いている？」

「え？　な、なに？」

「エッチなお姉さんは好きですか？　これからもこういう御褒美、欲しいですか？」
質問は、崇のペニスに向けて発せられている。

単純に昂奮する少年に対し、鞠子はあくまで理性的だった。痾る乳首を細い指先で捏ね回し、甘やかな吐息をこぼしながらも、静かな声で説明する。

「人間の身体って、たぶん、突き出たところとか凹んでいるところが感じやすいのよ。耳朶とか鼻の頭とか唇とか——もちろんクリトリスも、突き出ているところがいい場所。おヘソや腋、オマ○コは、凹んでいて気持ちいい場所ね」

やってみて、と囁いて、鞠子が手を退く。

「い、いいの？」

「いいわよ……っていうか、いちいち確認しない。最初はウブで可愛いと思ったけど、最近ちよつと面倒くさいわよ、タツくん。女のコがその気になるときは、男のコは四の五の言わず、ただすればいいの！」

なんとというワガママ。

男は女の奴隷じゃないぞ、と微かに思う崇だが、しかし理屈をすつ飛ばして頬を膨らませる鞠子は珍しい。まるで子供のようだ。

（自分で乳首を弄っているうちに、待ちきれない気分になったのかな？）

そう考えれば、横暴な美女も可愛らしい。

そして、知的な鞠子を淫らな駄々っ子に変えた乳首に、強い興味を覚える。

(そんなにコレ、気持ちイイのか……)
生唾を呑み込み、上擦る呼吸をなんとか抑えて——崇はまず、親指の腹で、小豆大の肉豆に恐る恐る触れた。

「ン……ッ！」

短く呻いた美女が、わずかに身を振る。

左右の乳房がイヤイヤするように弾み、少年の手を振り払った。

「い、いまので……イイの？」

「ダメ！ もつとギユツとして！」

耳の先まで真っ赤になった美女が、照れ隠しなのか怖い顔をして、キチンと正座し直す。太腿に両手を置いて腕を突っ張り、胸を張って——。

「もう一度。できれば、左右同時に……ね」

淫らな期待を頬に覗かせつつ、ソツと瞼を閉じる。

(こ、これだっ！ 俺のマリ姉は、コレだ！)

先ほどまでは哀しくなるほど現実的だった美女が、いまこの瞬間、童貞少年の想い描く理想の女性にすり替わった。いや、妄想よりさらに艶めかしく、美しく、しかもあり得ないほど可愛らしい。

「じゃあ、もう一回……」

息を整え、気合いを入れ直した崇は、揃えて伸ばした四本の指を乳房の側面へ添わせる形に。それとは直角に立てた親指で、勃起乳首にソツと触れる。

「ン……あっ!!」

反射的に身を振り、乳房を逃がそうとする鞠子。

弾む柔肉に指を喰い込ませ、崇はなおも、親指を押しつける。尖端を押しえられた肉豆が乳量の中央にめり込み、コリコリした硬さで指の腹を押し返してきた。

男の胸ではあり得ないことだから、現象としては面白いが——鞠子の顔色を盗み見ると、あまり気持ちよさそうではない。悪戯している幼子を、苦笑しながら見守っている慈母のような表情。

(これはダメなのか……)

思い直してすぐにやめた崇は、乳肉に押し出されて元の形に戻った乳首を、今度は人差し指と親指で軽く抓ってみる。

「ソツ!! ン……くううっ!!」

「あ、ごめん!」

痛そうに呻く鞠子を気遣い、慌てて手を離す崇。

だが、気を遣いすぎたようだった。逃げた手が掴まれ、引き戻される。

「力任せはダメ、でも遠慮のしすぎもダメよ。私をよく見て、ね」

「う、うん……」

「顔色、呼吸、眉とか目とかのわずかな動き——そういうものから感じ具合を察して、力や触り方を加減するのよ。いいわね？」

「うん、やってみる……」

普段の勉強よりも丁寧に、コツを教えてくれた。あまりにも艶やかな囁き声に、崇の背筋がゾクゾクつとなる。

逸る指先を意思の力で抑えて再び乳首に触れ、

（あ……これ？ さつきより、硬い？）

すぐに微妙な変化に気づいた。

わずかに揉んだだけで、こんなにも変わるものなのか——そう思うと、自然に好奇心が湧く。変化を知るためには当然、乱暴に扱ってはいけない。

慎重に、慎重に、と己に言い聞かせながら、まずは乳首の表面を撫でてみた。薔薇色に染まった肉豆もローションに濡れているから、ほかの肌との差はあまり感じられないのだが、

「うう？ あ、ヤンッ！ くすぐりたい！」

鈴が転がるような声で鞠子が笑い、両手で胸を押さえてイヤイヤと身を振る。

「いまのもの、ダメ？」

「え？ ううん、そんなことないわ。でも私、くすぐりには弱い。いまみたいにされたら、また逃げちゃうわよ」

そう言われると、ますますしたくなるのだが——若いペニスが限界に近い。

（また今度、試してみよう）

膨れあがる好奇心を抑えて、今度は——掌を自分の顔に向けて、人差し指と中指の間に乳首を挟む。軽く固定しておいて、乳頭をキュッキュツとしごく。

「あはっ！ いい、いいわよ、ソレ！」

嬉しそうな声を上げた鞠子が、もどかしそうに尻を揺らした。当然乳房も弾み、甘く香る粘液に濡れた肉豆がツルンと逃げる。

「動かないでよ、マリ姉」

「だつてえ……」

上目遣いになりながら、甘え声で微笑む鞠子。

本当に気持ちよかったのか、目の周りがほんのり紅い。自らの手で豊満な乳房を押

さえ、押し上げて――。

「……分かったわ。ごめんなさい。もう逃げないから、いまのをもう一回、して」
飼い主にじゃれつく仔犬のような表情で、しおらしくおねだり。

（か、か……可愛いッ！）

いつもの意地悪なお姉様ではない。はにかみながらいけない遊びを共有する、エッチな幼馴染みだ。

遙か彼方で眩しく輝いていた完全無欠の女神が、ようやく、手の届きそうな美女になった。当然崇も、もつともつとしてやりたいのは山々なのだが――。

「ま、マリ姉……」

「どうしたの？ なに泣いてるの……って、ああ、オチンチンね」

苦笑されても仕方がないほど、ペニスがギチギチに強張ってしまった。

もうダメだ、一刻の猶予もない。

「ごめん……お願い、早くして……」

己の手で握り締め、すぐさましごき出したい衝動を、抑え込むので精一杯。

「そうそう、御褒美はオッパイ弄りじゃなくて、パイズリだったわね」

物分かりよく頷いた鞠子が、しなやかな動きで膝立ちになった。ローションにぬめ

り光る美乳が崇の鼻先にグイッと迫り、若い弾力を見せつけて小気味よく揺れる。

「う……ああ……」

あまりの迫力に思わず息を呑み、なにをされるのか、と胸を高鳴らせながら硬直している——肩を支えられ、濡れたエアマットの上に横たえられた。ナイロンの冷たい感触に背筋がゾクゾクとなったが、下腹に湯をかけられ、すぐに治まる。

「このローションは、蜂蜜を主成分とした準食品なのよ。だから、乳首を気持ちよくしてくれたら、お礼にオッパイをしやぶらせてあげようと思っただけ……」

「えっ!? なんだよ、そういうことは早く言っ……あふっ!? ああ、ダメえっ!」
慌てて跳ね起きようとした崇だったが、勃起ペニスを握られ、軽くしごかれて、滾る肉悦に機先を制せられてしまった。

いつものスベスベとした鞠子の手ではない。

乳房に擦り込んだのと同じ蜂蜜ローションを、たっぷり塗したしなやかな手指。

しごかれた淫肉がヌチュ、ネチヨ、と微音を立てる。柔らかな指や掌のほどよい締めつけと、絡みつき粘り着く粘液の感触が、鞠子の熱い口唇に似て気持ちいい。

「ああ……くう……うううっ!」

ひとしごきごとに、ますます硬く、熱く、猛々しく怒張していく男根。

あと少しで本当に射精してしまおうだ。

「考えてみたら、甘やかせすぎね。私はタックんの個人教師なんだし、もっと厳しくしないと。だからオッパイおしやぶりは次の御褒美。それでいいわね？」

「だ、だったら……止めてッ！ 手を止めて、お願い……出ちゃう、出ちゃうよ！」

「ンもう、男のコでしょ？ これくらい我慢できないの？」

「男のコだから我慢できないのッ！」

仰向けになった背を反り返らせて、濡れたマットの上で悶える崇。

完全に弄ばれている。

快感を武器に、いいように虐められている。
しかし哀しいかな、非道い扱いにも慣れてしまった。あるいは本当にM男の素質があるのか——とにかく。

逃げ出そう、抗おうなどとは欠片も考えずに、

「早く、早く……早くしてよ、マリ姉ッ！」

涙をこぼして哀願しつつ、暴発しそうな射精欲求を必死に抑え込む。

赤らんだ額にフツフツと、脂汗の珠が浮く。

歯を喰い縛り、エアマットを掻きむしって、背筋をしきりにくねらせる。

「くううッ！　いいわ、いいわよタツくん！　その顔よ！」

サディスティックな悦びに頬を赤らめた鞠子が、ようやくペニスから手を離れた。
(た、助かつ……)

崇が息を継ぐより早く——むにゅっ！

「はふ……ッ!!」

温かくて重くて柔らかかななにかに、剛直がしつかりと啞え込まれる。

ハの字に開いた太腿の間、桃の実のような美尻を振り立てて四つん這いになった鞠子が、崇の股間に胸を寄せ、深い乳谷に勃起男根を挟み込んだのだ。

(こ、これが……ぱ……ぱ……ぱは、ぱぱはいずりッ!!)

弾けるように顔を上げたが、己の股間に見えるのは、桜色に輝く美女の乳房。左右から寄せ合わされて、横倒しにされた鏡餅のようだ。先ほどまで弄りまくっていた乳房は崇の腹にクリクリと触れ、硬さと熱さで鞠子の昂りを教えてくれる。

本当にいま、鞠子の乳房の間に、自分の勃起ペニスがはまり込んでいるのか——そう思うと、自分から望んだはずなのに、なぜかいけないことをしているような気分。なにしろ相手は、崇の妄想の中で長い間純粋無垢な聖女だったマリ姉なのだから。

本物とはんでもない淫女だと諦めたはずのいまでも、

「うわあ、熱い……オッパイが火傷しそうだわ」

うっとりとした顔で微笑みかけられると、自分が鞆子を墮落させたような気がして、あまりのうしろめたさに息が詰まる。

だが、鞆子を突き離そうとはしない——いや、できない。

ローションにぬめった乳肌が滾る肉棒に気持ちよく、すでに腰が抜けているのだ。

（なんだ、これ……気持ちいいけど、へ、変な、感じ……だ！）

手でされたときは、指と指の間にある浅い溝が快感のアクセントになっていた。口一杯に唾え込まれたときは、閃く舌に淫悦を産みつけられた。

だが、乳谷には——そういう器用さが一切ない。

ローションにぬめる絹地のような柔肌が心地よい圧力でペニス全体を包み込み、じわりと締めつけて、にゅち、にゅち、とわずかにズレ動くだけ。

単調ではあるが、しかし、容赦はない。

つけ根から尖端までがほぼ同じ強さで揉みまкруられ、均一な悦びが充満する。

「待って、マリ姉……出る、出る……出ちゃうよおっ！」

「やあねえタツくん、なに言ってるの？ まだ挟んだだけじゃない。本当のパイズリっていうのはねえ——こうするのよ！」

妖しく微笑んだ美女が、崇の腹の上で頭を前後させ始めた。

いや、頭だけではない。

豊かな乳房を自らの手で中央に寄せ合わせつつ、身体全体を擦りつけるような動きで、谷間に挟んだ逸物を責め立ててくる。

「く……は……うう……こ、これが……パイズリ……」

ヌルヌル滑る柔肌に、淫棒があますところなくしごきまくられる。柔らかく歪む温かな乳肉に、亀頭が揉まれまくる。肉棹が絞り上げられる。

手でしごかれたとき、口でしゃぶられたときは、まったく違う快感だ。つけ根から尖端まで、痺れるような肉悦が少しずつ蓄積していく。

「どう？ 気持ちイイ？」

「も、もちろん……うう、ああ……」

左右から押し潰されているだけではない。

いきり勃つた裏筋にコリコリと、瑞々しい柔肌に包まれた胸骨を感じる。その奥で激しく高鳴っている、健気な心臓を感じる。

（すごい、ドキドキしてる……マリ姉も昂奮してる……のかな？）

知らず知らず瞑っていた臉を薄く開け、フィゴのように上下している己の胸越しに

腹へ目をやると——ヘソの上で妖しく微笑んでいた美女と、視線が絡んだ。

「うふふ……本当に気持ちよさそうな顔ね。蕩けちゃいそうなの、タツくん？」

「そ、そう言うマリ姉だって……鏡見ろよ。す、すぐくエッチな顔……してる、ぞ」

「あら？ タツくんのクセに生意気ねえ。おしおきしなくっちゃ」

言うなり、鞠子が顔を伏せた。

首を深く曲げて崇のヘソに額を擦りつけ、同時に乳房を強く押し上げ——。

「ふあっ!! あ、ああ……ッ！」

亀頭にぬちゃりと貼りついてくる、乳房とは明らかに違う熱いぬめり。

乳谷から顔を覗かせた牡肉に、妖しく微笑む美女の口唇が覆い被さってきたのだ。

(ヤバイ、マズいっ！)

勃起ペニスを温かくて柔らかな乳肉にムニムニと揉み込まれているだけでも射精しそうだったのに、もつとも敏感な亀頭に、こんなことをされたら——。

思うより早く、淫棒の根元から筒先まで、熱い感覚が充満する。男根を逆流した甘やかな痺れがエアマットに横たわった背を駆け抜け、頭の芯が真っ白になっていく。

「ンちゅ……ンぷはっ！ 我慢汁、美味しい！ 蜂蜜の味と相俟って……ンちゅ、ちゅッ！ こんなオチンチンなら、毎日でもおしゃぶりしたいわね」

「やめて、ダメ……吸らないでッ！ あ、違……そこ、穿っちゃ、ダメええっ！」

少年の裏返った悲鳴は、当然のように無視。

れる、れちよ、にちゅ——。

先走り汁の滴を膨らませた鈴口が、尖った舌先に穿られた。吸盤になった唇が筒先に吸いつき、滲む先走り汁が容赦なく吸り取られる。

窮屈な姿勢のため、いやらしく蠢く鞠子の舌や唇は筒先にしか届かないが、そこは男根の中でも特に繊細な場所。ただでさえ感じやすい一帯を集中口撃されて、

「く……ッ！ は……ううっ！」

射精衝動がたちまち膨れあがった。

芯に溶岩を溜めたペニスがますます強張り、密着した乳肌の陰で青筋を立てる。

舐めしやぶられている亀頭が、これ以上ないほど硬くなる。

しかも、ヌルヌル滑る乳谷に怒張した肉茎が揉みまわられている。柔らかく絡みついてくる、蕩けるような乳房に、淫棒全体が絞り上げられる。

「だ、ダメ……本当にダメ、出ちゃう、出ちゃう、出ちゃうってばああっ！」

温かな乳肉にしごかれている男根はもちろん、腰骨まで蕩けてしまい——。

「あうああっ！」



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ! 19日発売!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルのパックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部のお愉快的Blogも更新中!



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・cranberryをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!